



第5回日韓文化交流基金賞

文化・芸術分野での交流を通じて日韓両国間の友好親善に寄与した韓国人の功績をたたえて贈られる「日韓文化交流基金賞」の第5回(2004年度)受賞者は、閔庚燦韓国芸術総合学校教授、朴裕河世宗大学校助教授、朴銓烈中央大学校教授の3名に決定しました。授賞式は、8月25日にソウル・ホテルロッテにおいて、第20回日韓文化交流基金韓国訪問団の答礼晩餐会の場で行われ、基金藤村正哉会長から賞状と副賞目録が手渡されました。



授賞式に臨む閔庚燦氏、朴裕河氏、朴銓烈氏夫人

受賞者プロフィール



閔庚燦 (ミン・ギョンチャン)

1957年生まれ

韓国芸術総合学校音楽院副院長、教授



朴裕河 (パク・ユハ)

1957年生まれ

世宗大学校日語日文学科助教授



朴銓烈 (パク・ジョンニョル)

1949年生まれ

中央大学校日語日文学科教授

受賞理由

日韓の唱歌、童謡などの源流と形成過程を研究し、両国の音楽の間にある深い関係を明らかにしました。2002年には、日韓の子どもたちによる童謡ユニットアルバム『DREAM TOGETHER!』(ビクターエンターテインメント)を制作し、両国でコンサートを開催するなど、両国間の音楽交流に大きく貢献しています。著書に『わが国洋楽100年』(共著、玄岩社、2001年)、『韓国唱歌の索引と解題』(韓国芸術総合学校韓国芸術研究所、1997年)などがあります。

受賞理由

著書やマスメディアを通じて、韓国社会に存在する日本に対するマイナスイメージの修正と正確な日本理解の増進に尽力し、韓国社会における日本イメージの改善に大きく貢献しています。著書に『反日民族主義を越えて』(社会評論、2004年)、『座談会 昭和文学史 第5巻』(共著、集英社、2004年)などがあるほか、夏目漱石、柄谷行人、大江健三郎など、日本の近現代文学作品の韓国語訳を数多く手がけています。

受賞理由

日本伝統文化論の専門家として、日本文化および日韓文化交流に関する事業を多数実施し、日本文化に対する理解の促進に尽力しています。中央大学校で開催し、毎回好評を博している歌舞伎、茶道、狂言などの日本伝統文化の公演とワークショップでは、朴教授が企画の中心的役割を果たしています。共著書に『日本の文化と芸術』(ハンヌリメディア、2000年)、『日本伝統文化論』(韓国放送通信大学校出版部、1999年)などがあります。

第20回日韓文化交流基金韓国訪問団

8月24日から27日にかけて、当基金の役員および文化関係者からなる「第20回日韓文化交流基金韓国訪問団」が訪韓し、ソウルと済州で要人への表敬訪問や、懇談などを行いました。

「日韓文化交流基金韓国訪問団」は、毎年1回訪韓し、韓日文化交流基金をはじめとする韓国側関係者や各界要人への表敬訪問、韓国在住の日本人との懇談などを行っています。

今回の訪韓団には映画関係者も参加し、訪問先で最近の「韓国映画・ドラマ」

ブームが話題となりました。20年を超える日韓・韓日文化交流基金の地道な活動があってこそ、このブームが花開いたのではないかという意見も聞かれました。

訪韓初日には、今年6月に韓日文化交流基金会長に就任した李洪九元務総理主催の歓迎晩餐会が開かれ、李会長から

は新しい次元の日韓関係構築に向けた抱負が語られました。

翌25日に開催した答礼晩餐会においては、藤村団長が、20年間にわたって韓日文化交流基金会長を務められた具滋暉LGグループ名誉会長に感謝の楯を贈呈しました。

日程

8月24日	ソウル到着 高野紀元駐韓大使表敬、 大使館員によるブリーフィング 韓日文化交流基金李洪九会長(元務総理)主催 歓迎晩餐会
8月25日	ソウルジャパクラブ役員との朝食会 裴鍾信文化観光部次官表敬 崔英鎮外交通商部次官表敬 基金訪韓フェローとの昼食懇談会 翰林大学校日本学研究所訪問 孔魯明所長(元外務部長官)表敬 藤村会長主催答礼晩餐会/ 第5回「日韓文化交流基金賞」授賞式
8月26日	済州到着 姜俊馨済州道国際関係諮問大使表敬 盆栽芸術苑視察 済州在住基金フェローシップ経験者との晩餐会
8月27日	申栄映画博物館視察 国立済州博物館視察 三姓穴視察 帰国



韓日文化交流基金李洪九会長主催晩餐会

参加者

団 長	藤村正哉	(財)日韓文化交流基金会長、 三菱マテリアル(株)相談役
副団長	内田富夫	(財)日韓文化交流基金理事長
顧 問	戸塚進也	(財)日韓文化交流基金常任理事、 元衆議院議員
顧 問	竹内宏	(財)日韓文化交流基金評議員、 (財)静岡総合研究機構理事長
顧 問	三浦隆	(財)日韓文化交流基金理事、 桐蔭横浜大学名誉教授
団 員	小山敬次郎	(財)日韓文化交流基金理事、 目白大学客員教授
団 員	竹下勅三	(財)日韓文化交流基金理事、 竹下事務所代表
団 員	楢崎正博	(財)日韓文化交流基金理事、 関電産業(株)前社長
団 員	梅田博之	麗澤大学学長
団 員	石川捷治	九州大学韓国研究センター長
団 員	前田二生	指揮者
団 員	高野悦子	岩波ホール総支配人
団 員	大竹洋子	東京国際女性映画祭ディレクター
団 員	中山隆夫	元日本鉄鋼連盟常務理事
団 員	堀泰三	(財)日韓文化交流基金理事・事務局長

翰林大学校日本学研究所訪問



このたびユネスコの世界文化遺産に登録された高句麗遺跡群は、中華人民共和国の東北地方と朝鮮民主主義人民共和国の西北部に所在する。中国の遺跡群は、遼寧省桓仁市にある高句麗前期の五女山城と、吉林省集安市にある高句麗中期の国内城・丸都山城、ならびに、中・後期の王・貴族の陵墓群26基である。一方、北朝鮮の場合、ピョンヤン特別市・平安南道・黄海南道・南浦市などに分布する、高句麗前～後期の壁画古墳16基がすべてである。

世界文化遺産に登録された遺跡群

中国では、登録申請に先立って大規模な発掘調査が行われた。その結果、数多くの重要な成果が上がっているので、今後の高句麗史研究に大きな前進をもたらすことはまちがいないだろう。そして、調査後には、遺跡群の環境整備が大きく進んだ。

北朝鮮の遺跡群の多くは、戦前に日本人が発掘調査したものである。もちろん戦後に調査されたものも数基含まれるが、中国のように登録申請に当たって新たに調査されたものはない。個々の壁画古墳の周辺整備は、中国と同じようによく行われている(写真)。壁画古墳のほとんどに、保護・観察施設を設けて保存に配慮されているが、限定的とはいえ見学が可能である点は非公開の中国と異なる。

ところで、中国・北朝鮮ともに、個々の遺跡の保存に万全が期されていることはいままでの間、さらに重要なことは、実に広大なバッファ・ゾーン(緩衝地帯)が確保され、遺跡を取り巻く環境もしくは景観保全が重視されている点である。

今回登録された都城の遺跡は中国に限られているが、中国・北朝鮮に共通した遺跡は壁画古墳である。高句麗最古の壁



徳興里古墳の入口付近の現状 (2000年8月23日、著者撮影)

画古墳は、黄海南道の安岳3号墳で、永和13年(357)に死去した冬寿の墳墓である。壁画の内容は、被葬者(墓主)の生前の肖像画や生活風俗図が主題となっている。ところが、6世紀に入ると、壁画の主題が高句麗独自に変化し、四神図が中心となる。ちなみに、この四神図は百濟ばかりか、キトラ古墳で見られるように大和まで影響を与えている。一方、北朝鮮で見られるような5～6世紀の壁画古墳は、中国の集安市でも、15基に認められる。ともあれ、今回登録された中国・北朝鮮の壁画古墳を通じて、4世紀中ごろから7世紀にわたる時期の壁画と、その背後にある思想の変遷、ならびに、その過程における高句麗の独創性や対外交渉の様子を知ることができるわけである。

高句麗の遺跡は、朝鮮半島中部の大韓民国においても認められる。戦後、京畿道や江原道で高句麗前期形式の積石塚が知られたが、最近では、ソウル特別市から京畿道にまたがる地域で、高句麗中期のフロンティアに関連する要塞あるいは砦の遺跡が調査され、注目されている。

高句麗と東アジアの現在

さて、いま韓国と中国の間で、そのような遺跡群を残した高句麗の歴史認識をめぐって、政治問題化している。というのは、高句麗を中国の一部とし、中国史の中で位置づけようとする中国に対して、高句麗を韓国古代史の重要部分とする韓国が発反しているのである。

しかし、これまでの高句麗史研究の蓄積を踏まえて、冷静かつ慎重に対処すべきであろう。また、今回の世界遺産登録を契機に、高句麗史研究に直接係わる中国・北朝鮮・韓国そして日本の関係諸国が、共通認識の形成に向けて、共同の調査や研究など協力しあっていく方を、模索すべきではなかろうか。

PROFILE

にしたに ただし



1938年生まれ。京都大学大学院修士課程修了。九州大学教授などを経て、現在、同名誉教授・伊都国歴史博物館館長・韓国伝統文化学校招聘教授・日本考古学協会副会長。編書に『韓半島考古学論叢』(すすさわ書店)などがある。

日韓文化交流会議 第5回全体会議開催、第2期の活動始まる

日韓文化交流会議は、委員の顔ぶれも新たに、6月25日（金）に京都で開催された第5回全体会議をもって、第2期の活動を本格的に始動しました。



両国座長・副座長。第1期の成果の上に、第2期ではさらなる日韓文化交流発展のための中・長期的な提言を行う

日韓文化交流会議は、去る6月25日（金）、京都ホテルオークラにて第5回全体会議を開催しました。3月に両国の第2期のメンバーが発表されて初の顔合わせとなる今回の全体会議では、2002年以來の両国の良好な関係や、大衆文化の紹介が進み相互に人気を博すなどの、日韓の関係が新しい段階に入ったことを評価する声が多く聞かれました。

会議冒頭の挨拶で、まず日本側の平山郁夫座長は、近年両国間の文化交流が発展し、「新しい文化共同体の形成」の萌芽が見える現状と、「日韓文化交流に関する宣言（ソウル宣言）」の発表などによって日韓文化交流会議が両国の文化交流において果たしてきた役割を評価しました。そして、今後本会議において両国間の交流をさらに深めるための中・長期的な提言を、それぞれの専門の立場から、総論・各論を問

わず行っていくこととしたい、と述べました。

続いて、韓国側の金容雲座長は、「ソウル宣言」にうたわれた精神が少しずつ実現されていることを嬉しく思うと述べ、韓国での日本大衆文化の事実上の全面開放など、これまで量的に成長してきた交流を、さらに質的にも高めていきたいと今後の会議の活動に対する期待を表しました。

基調講演においては、日本側の小此木副座長は、ワールドカップ共同開催を契機に、特に日本側において韓国に対する意識が画期的に変化していることを指摘した上で、両国間の自由貿易協定（FTA）の締結に見通しがつけば、ワールドカップ以上の意識変化から「共同体意識」が生まれ、それが「対等で互恵的な日韓関係」を生み、中国との新しい関係の創造にも発展しつつ、北東アジアの平和と安定に繋が

るであろう、と述べました。

一方、韓国側鄭求宗副座長は、「日韓友情年」の成功と中長期的な文化交流の基盤を作り出すためのアイデアとして、「日韓間の文化に関する相互理解の現状を探る国民世論調査」や、日韓合同の文化産業振興のための「日韓文化エキスポ」、両国の学者、マスコミ関係者、市民団体代表らが参加する、日韓友情年を記念する「セミナー」の開催などの行事のプランを提言しました。

引き続き、午前と午後にわたって行われた討論では、参加した各委員から、次のような意見が述べられました。

（1）日韓両国においてそれぞれ相手国の映像作品が成功をおさめていることを歓迎し、これが両国国民間の心の交流に大きな役割を果たしていることを評価する。また、このための関係者の努力を引き続き奨励していく。

（2）両国間文化交流の底辺、周辺を各界各層へ拡大していくことが重要であり、特に女性文化と青少年文化の交流の拡大が望まれる。

（3）2005年を通じて日韓両国で「日韓友情年」諸行事が準備中である



韓国側委員。新しい委員から積極的な発言が行われた



饗庭委員、芳賀委員、水谷委員、千委員(左から)



日本側委員。若い世代からの提言も期待される



崔成泓委員、千炳泰委員、李柱益委員、李惠慶委員(左から)

ことに留意し、これらの行事を通じて日韓両国民の友情が確認され、両国間文化交流がさらに深まることを期待する。

(4) 日韓間の文化交流は、今や交流のレベルを超えて実質的な「協力」を行う段階に達しており、日韓双方で世界に通用する文化コンテンツを共同で創造していくことも可能であろう。このような動きはひいては、アジア文

化共同体の土台を作り出すことにも繋がるであろう。

加えて、近い将来検討していくべき各種文化行事について、多くの委員から意見が提示されました。

会議終了後は、千玄室委員の招きで、両国委員一同が裏千家今日庵を拝観し、建築や調度、茶道具などの貴重な文化財を鑑賞した後、晩餐会で両国委

員が相互に交流を深めるとともに、日本の伝統的なもてなしの文化に触れる機会をもちました。

日韓文化交流会議では、継続してこのような意見交換の場をもつとともに、会議の提言の内容を両国の文化交流発展に生かすため、さまざまな活動や働きかけを行っていく予定です。

日程

6/24(木)	平山座長主催歓迎晩餐会
6/25(金)	第5回全体会議
	午前会議 司会：平山座長
	開会挨拶
	日本側：平山郁夫座長 韓国側：金容雲座長
	主題発表および質疑応答
	日本側：小此木政夫副座長 韓国側：鄭求宗副座長
	昼食
	午後会議 司会：金容雲座長
	裏千家今日庵拝観
	千玄室委員主催晩餐会

日韓文化交流会議のあゆみ

1999.7	第1回合同運営委員会(東京)
1999.9	第1回全体会議(ソウル)、両国から18名のメンバーが参加しスタート
2000.1	第2回合同運営委員会(ソウル)
2000.6	第2回全体会議(東京)、前回合意事項の状況報告、「ソウル宣言」草案初検討
2000.8-9	韓国側委員の日本国内サッカーワールドカップ開催地視察
2001.1	第3回合同運営委員会(東京)
2002.1	第4回合同運営委員会(東京)
2002.3	第5回合同運営委員会(ソウル)
2002.5	第3回全体会議(韓国・慶州)、「ソウル宣言」発表に向けての意見交換継続
2002.8	第6回合同運営委員会(東京)
2002.10	第4回全体会議(ソウル)、「日韓文化交流に関する宣言(ソウル宣言)」発表
2003.2	第7回合同運営委員会(東京)
2004.5	第8回合同運営委員会(ソウル)
2004.6	第5回全体会議(京都)、新メンバーを迎えて第2期活動開始

メンバー

日本側

座長	
平山郁夫	画家、東京藝術大学学長
副座長	
小此木政夫	慶應義塾大学教授
松尾修吾	国立科学博物館監事
委員	
饗庭孝典	東アジア近代史学会副会長
亞洲奈みづほ	作家
新井満	作家
千玄室	前裏千家家元
芳賀徹	京都造形芸術大学学長
広中平祐	(財)数理科学振興会理事長
黛まどか	俳人
水谷幸正	浄土宗宗務総長

韓国側

座長	
金容雲(キム・ヨンウン)	漢陽大学校名誉教授
副座長	
柳鈞(リュ・ギョン)	韓・日友情の年(日韓友情年2005)諮問委員会委員
鄭求宗(チョン・グジョン)	東亜ドットコム社長
委員	
金然鐘(キム・ヒュジョン)	文化コンテンツ学会理事、秋溪芸術大学校文化産業大学院長
都正一(ト・ジョンイル)	民族文学参加会議諮問委員、文化改革市民連帯共同代表
李柱益(イ・ジュイク)	ポラム映画社代表理事
李惠慶(イ・ヘギョン)	ソウル女性映画祭執行委員、女性文化芸術企画代表
林英雄(イム・ヨンウン)	大韓民国芸術院会員、劇団「サヌリム」代表
林貞希(イム・ジョンヒ)	(社)明るい青少年支援センター代表
千炳泰(チョン・ピョンテ)	釜山大学校法科大学教授
崔成泓(チェ・ソンホン)	元外交通商部長官

本校が、韓国・ソウルの三角山初等学校と交流を始めて今年で4年目を迎える。この交流は、本校の前校長のソウル日本人学校勤務が縁で始まった。

本校にとって韓国からの訪問団受け入れは2度目で、学校や保護者、村教委等も手馴れて、順調に準備が進められた。総勢32名（児童24名、引率8名）の1泊2日の訪村記をご紹介します。

手作り交流の2日間

8月7日、午後4時半。予定通り関西空港へ一行は到着。出迎えのバスに乗り込んで点呼を始めて事件発生。パスポートを落としたり。通関付近で係員が拾っていたということで無事出発。この間30分のロスタイム。大阪・神戸の市街地を高速道路の車中から見学。ソウル市街と同じ景色らしく、子どもたちの歓声はわずか。ところが、明石海峡大橋にさしかかると一変した。ライトアップされた橋の雄姿に大歓声。展望台で、韓国語が飛び交い、居合わせた人々も目を白黒。しかし、ゆっくりしている間はない。佐那河内村まで、まだ二時間余の行程がある。徳島市を通過し、本村の灯りが見えたのは夜の9時をまわっていた。

24名の子どもたちを各ホームステイ先へお願いして、10時前から引率の父母や教師の方と、大人同士の交流会を開いた。三角山初等学校の側で、日本語が話せる人は一人だけ。こちらで韓国語がわかる人は皆無。それでも会は盛り上がり、日付が変わる頃、村内唯一の民宿で就寝となった。安心だけが取り柄のような村。

翌日（8月8日）は、午前8時学校集合。村内唯一の佐那河内小学校。全校児童117名。この日を夏休み中の登校日にし



見事な舞踊を披露する三角山初等学校の子どもたち

て、全校児童で国際交流の勉強。三角山初等学校は、ソウルの住宅地のマンモス校ということで、周囲を緑で囲まれ、小川のせせらぎや蝉のなき声が聞かれる本校の環境にびっくりの様子。韓国の伝統舞踊（写真）や阿波おどりで交流は深まっていく。10時半。迎えのバスが到着。一行は、次の目的地奈良公園へ出発した。

夜9時を過ぎて到着。翌朝10時半には出発。例えが悪いが台風の佐那河内上陸のような感じであった。とにかく疲れた2日間だった。

韓国に友達ができ

今、訪問記の執筆をしながら心に浮かぶのは受け入れて良かった、という気持ちである。

第一に、他国の言語に接したこと。言葉がわからず四苦八苦したこと。中学校で本格的に英語学習を始める子どもたちに、外国語を話せるようになりたいという意識が芽生えたことを確信した。

第二に、人の心に言語の違いはないということ。親切、信頼、思いやり、これら人間としてもっとも大切な心は、どこ



歓迎会。ソウルから来た友だちを温かく迎える佐那河内小学校の子どもたち

の国でも共通だということを子どもも私たち大人も学んだ。

第三は、「行ってみたい韓国へ」の気持ちが強くなったことだ。観光でなくあの人たちに再会するために韓国へ行きたいという心で訪問記を書いている私である。国境を越えて、信じ合える友人ができたことに何よりの喜びを抱きながら報告としたい。

PROFILE

たけはら あきら



愛媛県生まれ。徳島大学教育学部卒業。徳島県公立小学校教員を経て現在に至る。自称何でも75点。体育実技指導、木工工作、竹細工、レク指導熱血先生として30年。今夏も競泳用水着を着用して水泳指導に情熱を傾けている。趣味で始めたゴルフの腕前も75点。今秋に韓国訪問を計画中。韓国語は0点（只今勉強中）。

2004年度 下半期助成対象事業

2004年度下半期の助成事業の募集には61件の申請があり、
この中から26件への助成が決定いたしました。

青少年・草の根交流（日韓共同未来プロジェクト） 15件

事業名	申請団体	実施時期	場 所
ハンマウム文化祭	NPO法人狭山市ハンマウムの会	2004/10/4-10/5	又石中学校ホール
日韓俳句大会並びに講演会	SEOUL JAPAN CLUB	2004/10/9-10/11	ソウル
日韓文化交流「コサリの架け橋」 ファイナルステージ	わらび座	2004/10/11-10/14	秋田・たざわこ芸術村
第37回習志野市八千代市 教育と子どもを語る市民集会	習志野市八千代市教育と子どもを 語る市民集会実行委員会	2004/10/17	千葉・八千代市立八千代台中学校
東北アジア国際ワンコリアフェスティバル 2004	ワンコリアフェスティバル 実行委員会	2004/10/24	大阪城公園・太陽の広場
第5回日韓学生シンポジウム	東北大学多元物質科学研究所 水崎研究室	2004/10/27-10/31	江原・雪岳ハンファリゾート
Move Around/Dive Deep	+Gallery（プラスギャラリー）	2004/10/28- 2005/3/21	暁園中学校、名古屋・市民ギャラリー矢田
第15回アジア環境・文化交流会 「アジア麻工芸技術交流展」	特定非営利活動法人 アジア環境保全センター	2004/11/19-11/24	東京
第34回日韓学生会議	日本国際学生協会	2004/12/22-12/28	北九州市、山口
韓国江原道と日本秋田県の民謡比較研修及び 講義・両国伝統芸能の交流	天のソリ（音楽）・地のソリ（音楽）	2005/1/3-1/11	秋田・たざわこ芸術村ほか
「Animate。」展	ナンジョウアンドアソシエイツ	2005/2/3-3/29	福岡アジア美術館
日韓大綱引き交流事業	刈和野大綱引保存会	2005/2/10-2/14	忠南・唐津郡松嶽面
草の根日韓美術交流絵画展	へいわ西尾張インターナショナルクラブ	2005/2/10-2/20	愛知県下水道科学館ギャラリー
学生のための国際ビジネスコンテスト OVAL2005	学生シンクタンクWAAV内OVAL 実行委員会	2005/2/21-2/27	国立オリンピック記念青少年総合センター、 東京芸術劇場
日韓・フレンドシップ乗馬交流	特定非営利活動法人 RDA Japan	2005/3/26-3/29	ソウル・韓国RDAサムソン

シンポジウム・国際会議 5件

事業名	申請団体	実施時期	場 所
「変化する東アジアにおける保育・幼児教育の 動向と子育て支援—中国・韓国における保育と 子育て支援について」	日本福祉大学 21世紀COEプログラム	2004/10/9-10/10	日本福祉大学
第2回東アジア環境市民会議	東アジア環境情報発信所	2004/11/5	ソウル・フランシスコ会館
日韓国民交流年2005イベント 「元気な韓国：女性が拓く日韓新時代」	九州大学韓国研究センター	2004/11/19	福岡・アクロス福岡
日韓近現代歴史資料の共用化へ向けて —アーカイブズ学からの接近—	人間文化研究機構国文学研究資料 館アーカイブズ研究系	2004/12/11-12/12	学習院大学
「東アジアの平和と民主主義」 国際学術シンポジウム—「日韓国交40周年～ 日本の針路を考える」	聖学院大学総合研究所日韓現代史 研究センター	2005/2/19	東京・都市センターホール

芸術交流 6件

事業名	申請団体	実施時期	場 所
『ソウルノート 日韓合同公演』 (原題：『東京ノート』)	有限会社アゴラ企画・青年団	2004/10/4-10/24	ソウル・ハクチョンシアター
シアターアンネフォールプロダクション2004 「BLASTED（爆風）」	特定非営利活動法人 シアターアンネフォール	2004/10/6- 2005/1/23	東京・シアターX、大阪・ドーンセンター、 ソウル・サムジースペースほか
所沢市・安養市合唱交歓演奏会	所沢メンネルコール	2004/10/15-10/17	京畿・安養市 坪村アートホール
日韓合同打楽器アンサンブル演奏会	日韓打楽器合奏交流実行委員会	2004/11/22-11/27	ソウル・芸術の殿堂
韓国現代戯曲ドラマリーディング およびシンポジウムvol2	日韓演劇交流センター	2005/2/18-2/20	東京・シアタートラム
「水の音原風景」韓国プロジェクト2004	ウォーターネットワーク	2005/3/2-3/6	在大韓民国日本国大使館公報文化院

江戸時代における日本（人）と朝鮮（人）の境界認識・相互認識について考えています。前近代社会の人々が、「日本」なり「朝鮮」なりにそれぞれ引き寄せられ、引き裂かれてゆく、求心力と遠心力の働きようについて、文献史料をもとに具体像を描きたいなあと苦心し続けているところです。

7月末に、ソウル大付属図書館6階の古文献資料室を訪ねました。『隠州

視聴合記』という江戸時代の写本（享和2年=1802年）が所蔵されていることに気づいたからです。この史料はもともと、寛文7年（1667）、出雲藩士斎藤豊仙の手になるものです。その一部に当時における日本と朝鮮の境界認識を示した部分があることで知られ、1950年代以来、様々に議論となってきました。しかしながら、これまではテキスト批判抜きの議論が重ねられてき

た感じがします。

使用テキストをめぐって

たとえば川上健三氏が1953年に使用したテキストは、『続々群書類従』に収録されたもの（テキストA）ですが、同氏が1966年に使用したものは、割注に「按神書所謂五十猛歟」とする部分が付け加わるなど史料文は明らかに異なっています（テキストB）。1980年代以後この議論に加わった慎齋夏氏はテキストBを使用しており、典拠は川上健三氏の著書といます。また、田川孝三氏が1950年代末～60年代初めに使用したのはテキストAと同文であり、1990年代以後の下條正男氏が使用しているのはテキストBと同文です。一方、1950～60年代に、黄相基氏・李漢基氏が使用したものは、テキストBに近いものですが同じではなく（割注部分の「神書」を「神言」とする）、テキストAでもありません（テキストC）。このほかにも論者は何人かにわたりますが、使用テキストは概ね上記ABCのいずれかと同文です。

さて、ソウル大の写本です。これは、テキストAにいくつかの字句が付け加わったものです。ひとつは、方角表示に際して「南」を「南ノ方」、「辰巳」を「辰巳ノ方」としたりする部分です。今ひとつは、割注部分に「按神言所謂五十猛歟」とする部分があることです。前者は李漢基氏の引用史料と共通し、後者は黄相基氏が『東亜日報』1957年



博物館・資料館に足を運ぶのも大事な仕事。規模はやや小さくなるが、誠信女子大の古地図や済州大の漁具など、大学附属の施設に興味深いコレクションがあったりする。一方、完成間近の新・国立中央博物館（写真。国鉄二村駅～西水庫駅間の車内から）を見るたびに、朝鮮総督府の建物を使用した旧・中央博物館の撤去が、短期間に決定・実施されたことを思い出す。当時、韓国内の歴史学会がこぞって撤去賛成の声をあげた。某学会の席で撤去推進の署名に協力を求められ、歴史研究者が歴史遺物の保存ではなく破壊を主張するのが納得できない旨を述べると、「これは論理ではない、感情なのだ」という返答があり、たいへん戸惑った。こうした風潮のなか、ある週刊の時事雑誌だけが学芸員たちの不安を伝えた。「こんな急な撤去の実施だなんて、展示物の移動はもちろん、保管庫にある遺物はどこに移転・保存が可能なのか」と。人は目に見えるものに心を奪われがちだが、博物館の機能は展示だけではない。蒐集・分析・保管もまた重要だ。撤去からほぼ10年経った。

3月1日付の連載記事（第2回目）で使用した史料と共通する特徴です。両者とも引用史料に省略があるため、完全な一致を確認できるわけではありませんが、概ねソウル大の写本はテキストCと一致するとして良いと考えます。

黄相基氏は1954年にソウル大法科大の碩士（修士）課程を修了した人であり、李漢基氏はその指導教授でした。おそらく50年ほど前のある日、お二人はこの同じ写本を手にとって筆写されていたのではないのでしょうか。19世紀初めの写本とはいえ、直接原典にあたりながら、議論の一方をかたちづいていた姿が偲ばれます。

韓国人の発想に触れる

『隠州視聴合記』の解釈をめぐる議論に参加しようと思い、韓日関係史学会9月例会で現在の考えを報告する予定です。月例会（韓日関係史学会・日本歴史学会）で研究報告を聞き、討論に参加するのは、韓国滞在中の楽しみのひとつです。

韓国語能力の不足から、討論を100%理解できているわけではありませんが、たとえば、「日本近代史を分析しようとしながら、史料を残した人間の発想（＝日本人の発想）に絡めとられている研究が少なくなく、しかもそのことに無自覚だ」とか、「帰国を望んだものが優れていて、そうでないものは駄目なんだ、とする物差しで

（17世紀初めの）朝鮮人被虜の問題を取り扱うべきではない」というのが、最近の月例会で印象に残った発言です。韓国人の発想に直接触れながら、相互認識の問題に接近できれば、といつも念じています。



今年4月、韓国人研究者と共同で、釜山と対馬で史料調査をした。4月2日、蔚山大学校・卞光錫先生の案内で、釜山市内の近世遺跡を踏査した。写真は、18世紀半ばに、ときの東萊府使によって建てられた東萊温泉改建碑。（撮影は韓国国史編纂委員会の李薫先生）



4月3日、対馬へ渡る。雨まじりの曇天のため、港を出て40分ほどして、ようやく対馬の島影が見える。越境を実感させられたのは海上ではなく、釜山港と厳原港の通関時。対馬では韓国の携帯電話がそのまま通じるとの噂だったが、だめだった。

PROFILE

いけうち さとし



名古屋大学大学院文学研究科教授。昨年12月1日から今年11月30日まで、檀国大学校東洋学研究所に特別客員研究員として滞在中。著書に『近世日本と朝鮮漂流民』（臨川書店、1998年）、『「唐人殺し」の世界』（臨川書店、1999年）、論文に『解体期冊封体制下の日朝交渉』（『朝鮮史研究会論文集』41、2003年）等がある。

日韓文化交流基金事業報告

7月～9月

「日韓共同研究叢書」新刊

日韓共同研究フォーラム第1次研究チームの研究成果として、以下の2冊の図書が慶應義塾大学出版会から刊行されました。

政治チーム



第6巻
『変動期の日韓政治比較』
(曾根泰教・崔章集編)

政党制や労働運動などを例に、日韓政治体制の共通性と異質性を論ずる共同研究である。アメリカ政治学のレンズを通して行われてきた日韓両国の政治体制研究のバイアスを払拭し、日韓間に共通の概念や理論の構築を目指す。

北朝鮮チーム



第7巻『金正日体制の北朝鮮
-政治・外交・経済・思想』
(伊豆見元・張達重編)

金正日体制確立期の数年を対象として、当初脆弱と見られた体制を実際に支える本質は何であるかをテーマに、日々変化を間近に感じ、南北関係政策の立案にも関わる韓国の研究者が、日本の第一線の研究者と共同研究を繰り返し、独自の視点を展開する。

韓国図書翻訳出版事業「韓国の学術と文化」シリーズ新刊

以下の図書が韓国図書翻訳出版事業の一環として法政大学出版局から刊行されました。



『韓国政治のダイナミズム』
(韓培浩著、木宮正史・磯崎典世訳)

朝鮮戦争以来北の強固な軍事体制に直接対峙しつつ、駐留アメリカ軍の影響下、李承晩、朴正熙、全斗煥らによって繰り返し出現した軍事独裁政権の変転を権威主義体制の制度化の失敗の過程として位置づけ、この半世紀間の韓国政治の変動をトータルに捉えなおす。

図書出版助成

『韓国語概説』
(李翊燮ほか著、梅田博之監修、前田真彦訳)

文字、音韻、文法構造、敬語、歴史から方言まで、韓国語を言語学的に知るために必要なことがらが盛り込まれた韓国語学の入門書。容易に韓国語の姿を把握できるよう、豊富な例文にはすべて日本語訳をつけ、必要に応じてハングルにアルファベットで読み方を付した。



日韓ガールスカウト交流事業

(社)ガールスカウト日本連盟への委託事業である「日韓ガールスカウト交流事業」が7月28日から8月9日の日程で行われ、韓国のガールスカウトが日本を訪問しました。茨城、神奈川での地区プログラムと東京での本部プログラムを通じて、日本のガールスカウトと交流を深めました。



グループ討議後の自由な語り(茨城県)

日韓ガールスカウト交流日程

7/28	成田空港到着後、地区プログラムに移動		
7/29 - 8/4	地区プログラム（茨城県支部、神奈川県支部）	交流会、ディスカッション、見学、県庁表敬訪問、ホームステイなど	
8/4 - 8/8	本部プログラム（東京）	開会式、都内グループ散策、交流会 公開プログラム—文化紹介 ギャザリング分科会、全体会、お別れパーティー 閉会式	
8/9	帰国		

訪日団

団体名	団長	計	男	女	期間	訪問校
高等学校 日本語教員	田泰重 江西高等学校 教諭	20	5	15	9/14 - 9/22	都立つばさ総合高等学校、神奈川県立商工高等学校、和歌山県立桐蔭高等学校

訪韓団

団体名	団長	計	男	女	期間	訪問校
大学生（2）	油谷幸利 同志社大学言語文化教育研究センター教授	20	7	13	9/7 - 9/16	弘益大学校、慶州大学校

中高生訪韓団

団体名	団長	計	男*	女*	期間	訪問校
香川県中学生	山下祐一 高松市立城内中学校校長	109	33	65	9/4 - 9/8	明逸中学校
北海道高校生	小原信夫 北海道教育庁教育指導監	107	26	71	9/15 - 9/19	冠岳高等学校

※生徒のみの人数

公募プログラム案内

2005年度 招聘・派遣フェロースhip

2005年度の研究者招聘・派遣フェロースhipの申請期間は、10月1日から10月31日までです。招聘フェロースhipは、在韓日本国大使館、総領事館で申請を受け付け、派遣フェロースhipは日韓文化交流基金で受け付けます。申請の要項および書式は、基金ウェブサイトからダウンロードして入手できます。

招聘フェロースhipは日韓文化交流基金で受け付けます。申請の要項および書式は、基金ウェブサイトからダウンロードして入手できます。

2005年度 人物交流助成

2005年度（2005年4月～2006年3月）の人物交流助成の募集要項と申請書が完成しました。2004年度までの制度から変更された点がありますので、詳しくは要項をご覧ください。要項および申請書をご希望の方は、基金ウェブサイトからファイルをダウンロードするか、基金に直接お問合せください。

上半期募集（2005年度全期間の事業を対象とする）は**2005年1月4日から2月1日**まで、下半期募集（2005年10月～2006年3月に実施する事業を対象とする）は**2005年6月1日から7月1日**までの期間にそれぞれ申請を受け付けます。

		青少年・草の根交流	国際会議・シンポジウム	芸術交流
団体の申請資格	日本所在	○	○	○
	韓国所在	○	○	×
対象費目	渡航費	○	○	○
	宿泊費	○	○	○
	会場借用費	×	○	○
	資料作成費	×	○	×
	通訳費	×	○	○
上限金額		100万円	50万円	

日韓友情年2005

～進もう未来へ、一緒に世界へ～



日韓友情年 2005

進もう未来へ、一緒に世界へ

2005年は「日韓友情年2005」として、両国国民の間の交流を深めるために、さまざまな文化行事やイベントを予定しています。

日韓友情年2005のコンセプトは何ですか？

日韓両国は、2002年のワールドカップ・サッカー共同開催や「日韓国民交流年」を経て、かつてないほど親近感を深めました。また、両国は、「一日生活圏」の更なる拡大を目指し、経済・社会分野でも日に日に緊密度を増しています。日韓国交正常化40周年となる2005年には、更に文化、経済、社会な

どあらゆる分野において交流を進め、21世紀を共に歩む日韓関係の礎を築いていきます。「日韓友情年2005～進もう未来へ、一緒に世界へ～」をキーワードとして、次世代を担う若者をはじめとして、両国国民の間の友情と相互理解を更に深めます。

ロゴマークはどんな意味ですか？

日韓両国の国旗で構成された円と太極をモチーフに、二人の人物の姿を表現したものです。仲良く微笑み、互いに頭をくっつけている二人は、互いに対する信頼を基礎に、未来に

向けて準備していくことを示しています。デザインは韓国側で制作したものです。

どんなイベントがありますか？

2005年はオープニングイベントに始まり、文化、芸術、観光、スポーツなど、さまざまなジャンルで行事が開催されるほか、両国市民による手作りのイベントやお祭りなど、市民が主役となる行事も予定されています。

これらのイベントの情報は、今後友情年のウェブサイトで紹介していきます。

日韓友情年2005ウェブサイト（現在は準備サイト）

<http://www.jkcf.or.jp/friendship2005/>

記念事業に認定された行事を紹介する、「イベントカレンダー」を中心に、友情年のさまざまな取り組みを広報します。このサイトの運営は日韓文化交流基金が担当します。

来年開催する行事に記念事業の認定を受けたいのですが？

日本側の主催事業に対しては、「日韓友情年2005」実行委員会が「記念事業」の認定を行います。認定を受けた事業は、名称・ロゴマークの使用が認められ、「イベントカレンダー」

に掲載されます。申請は「日韓友情年2005」事務局で受け付けます。エントリーシート（申請書）は、友情年のウェブサイトからダウンロードできます。

「日韓友情年2005」実行委員会

●委員長

平山 郁夫 日本画家、東京芸術大学 学長

●副委員長

瀬戸 雄三 (社)日韓経済協会 会長、
(財)日韓産業技術協力財団 理事長
成田 豊 (株)電通 最高顧問

●委員 (50音順)

小倉 紀藏 東海大学外国語教育センター 助教授
姜 信子 作家
崔 洋一 映画監督
平田 オリザ 劇作家、演出家
依田 巽 (財)音楽産業・文化振興財団 理事長

問合せ先

「日韓友情年2005」事務局

住所：東京都千代田区霞ヶ関2-2-1 <http://www.jkcf.or.jp/friendship2005/>
電話：03-3581-0462 FAX：03-5501-8257